

視覚障害と知的障害を併せ有する子どもとの音楽活動 におけるコミュニケーションの促進に関する研究

渡邊 朋子

I 問題

視覚障害のある子どもは情報の不足から周囲の状況を把握できず、強い不安感をもつ等の傾向がある。そのため、自発的な表出が乏しく、周囲の人とともに取り組む活動（共有する活動）が持ちにくいいため、共同的・相互的コミュニケーションが生じにくいという課題をもっている。

子どもとの初期的コミュニケーションを成立させるために、まず子どもの自発的な表出を引き出すことが重要である。土谷・菅井 (2000) は、子どものイニシアチブをもとに子どもとかがわり手が共有し合う活動テーマを作り出し、その活動を共有するなかで情動的にも共有し、子どもにとって喜びに満ちた活動にしていくことで、子どもの行動はその経験を踏まえた表出となり、能動的、自発的、創造的なものになると述べている。

II 事例対象児

視覚障害（全盲）と知的障害を併せ有する女兒 M（かがわり開始時、CA 5 歳 10 ヶ月）。M はわかりにくい状況におかれているため、かがわり合いにおいて受動的・依存的な傾向になり周囲の人と共有する活動が乏しくなりがちである。しかし、音楽活動を行なう際には、自発的な身体表出（情動表出や楽器を振る等）がみられていた。

III 目的

共同的活動としての音楽活動に取り組むことが M の身体表出及びかがわり手との相互的コミュニケーションを促進する上で、有効であることを検討する。

IV 方法

1 音楽活動の場と期間：J 大学の障害児教育実践センターにおいて約 90 分のかがわり合いの中で約 20 分～30 分の活動を行った。期間は平成 17 年 10 月～平成 18 年 7 月まで計 25 回である。

2 共同的活動としての音楽活動の定義：指導教員 T のスーパーバイズを受けながら、かがわり手 W

（筆者）がキーボードの伴奏を弾き、かがわり手 S（その場に同席する院生数名と M の家族）が歌を歌って、M と共に楽器を演奏する活動。なお、曲は M がこれまでの教育相談の際に興味を示した、擬態語が入った曲等を取り上げ。

3 音楽活動における M の身体表出の定義：1) 音楽活動を行っている間の M の情動表出、2) M のかがわり手へ向けての身体表出、3) 楽器の扱いにおける身体表出

4 音楽活動の設定条件：共同的活動状況を設けた。共同的活動状況とは、M がかがわり手 S のうちの一人と二人で重奏する、1 つの楽器を M と W が二人で演奏する等である。

5 資料収集の方法：資料収集の対象は、M とかがわり手 S が 2 人で重奏する活動である。M とかがわり手 S が重奏する活動とは、原則としてかがわり手 S が M の近くに座り、M とかがわり手 S がそれぞれ持っている楽器を W のキーボード伴奏に合わせて一緒に演奏する場面のことである。その場面をデジタルビデオカメラで記録した。

6 分析の視点

1) 音楽活動における M の情動表出の変化：分析は M がかがわり手 S と 2 人で重奏する活動の中で、演奏開始から演奏終了まで行う。M の情動表出を「笑顔になり、身体を動かす（全身を揺する、手を振る等）」、「笑顔」、「笑顔なし」の 3 条件により整理した。

2) 共同的活動としての音楽活動における M からかがわり手へ向けての表出の変化

(1) M のかがわり手へ向けての手の動きの変化：M の「一緒に演奏するかがわり手 S へ向けての手の動き」、「一緒に演奏するかがわり手 S への移動」の回数の変化について分析する。

(2) M からかがわり手へ向けての情動表出の変化：かがわり手 S が初めて「M ちゃん、一緒にやろう」等と M に声を掛ける場面の M の反応を分析

した。a: 笑顔になり、手を振る、b: 笑顔になる、c: 笑顔にはならないが、相手に対して何らかの反応を示す、d: 反応なしの 4 条件によって整理した。3) 共同的活動としての音楽活動における M とかかわり手との相互作用の様相: セッションの開始日と終了日の他、6. の 2) の (1) の分析に基づき、手を動かした回数が多かったセッションと少なかったセッションを抽出し、演奏前と演奏後に M、一緒に演奏するかかわり手 S、W の 3 人がかかわり合う場面を分析する。その場面について、M とかかわり手の相互作用成立状態と相互作用成立水準をコミュニケーション単位 (CU) (三宅ら, 1974) とインタラクション単位 (IU) (三宅ら, 1974) により把握し、相互作用成立状態 (伊藤・西村, 1999)、相互作用の継続時間を分析する。相互作用成立状態は相互作用の成立状態を A 水準 (相互作用成立状態)、B 水準 (相互作用成立寸前状態)、C 水準 (相互作用不成立状態) に分け、さらに行動の開始者が M から (I 型)、かかわり手から (II 型) の 3 水準 6 型に整理した。

V 結果

1 共同的活動の状況設定

共同的活動状況の状況設定は M の身体表出が活発になるよう変化させていった。セッション 7 から導入した「まねっこのうた」では M の情動表出がみられなくなった。そこでセッション 10 では M の情動表出を促進するためセッション 6 までのかかわり合いのなかで M の喜びの情動表出がみられた「小鳥の歌」を再開した。セッション 15 では活動の共有を全盲の M にとってわかりやすくするため、M と W とかかわり手 S のおそろいのプレスレットを用意し、かかわり手 S にそのプレスレットを渡す活動を始めた。このように M の身体表出を促進するような状況設定に変えたセッションを区切りとして、全体を第 I 期 (セッション 1~9)、第 II 期 (セッション 10~14)、第 III 期 (セッション 15~25) に分けた。

2 共同的活動としての音楽活動における M の情動表出の変化

資料収集の対象である重奏する活動の演奏中の M の情動表出について図 1 より、セッション 6 ま

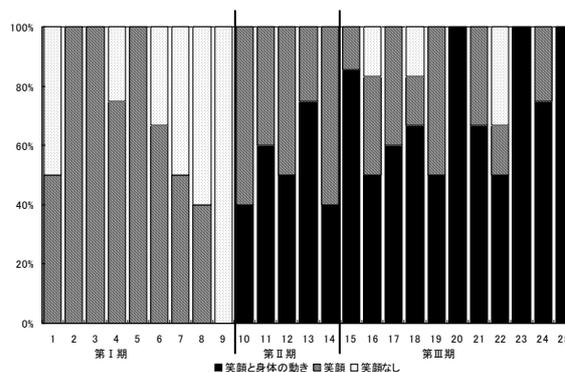


図 1 演奏中の M の情動表出の変化

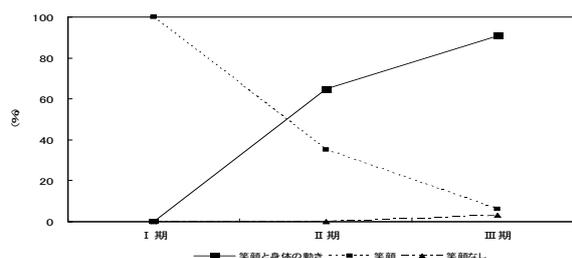


図 2 「小鳥の歌」における M の情動表出の割合の変化

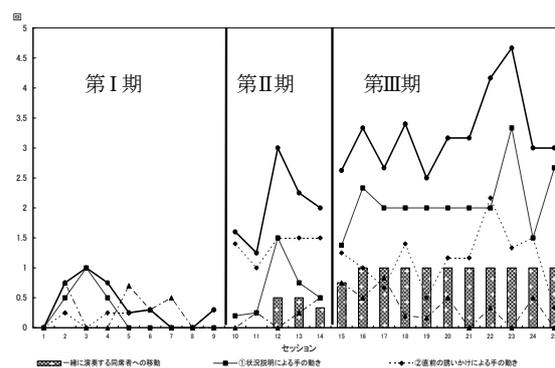


図 3 一緒に演奏するかかわり手 S に対する手の動きと移動の回数の平均

では「笑顔」が多いが、セッション 7~9 にかけて「笑顔なし」が増加した。しかし、セッション 10 からは「笑顔と身体の動き」が増加していった。

また「小鳥の歌」における各期の情動表出を比較すると (図 2)、第 I 期では「笑顔」が 100% となっているが、第 II 期では「笑顔と身体の動き」が 65%、第 III 期では 91% と顕著に増加している。

3 共同的活動としての音楽活動における M からかかわり手へ向けての表出の変化

1) M のかかわり手へ向けての手の動きの変化

M がかかわり手 S に手を動かした回数の平均

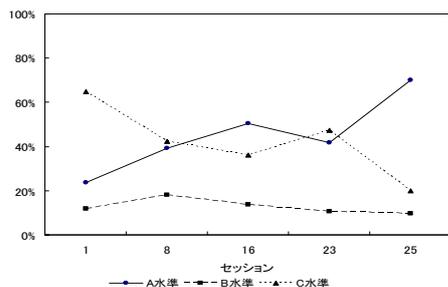


図 4 相互作用成立水準の推移

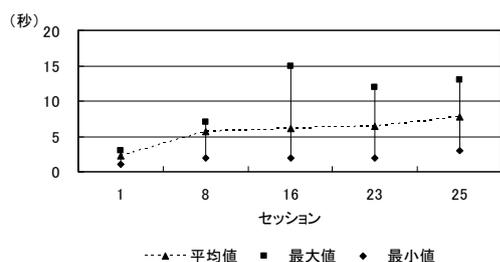


図 5 A-II の継続時間の推移

(図 3) は第 I 期は 1 回以下であったが、「小鳥の歌」を再開した第 II 期では 1.3~3.0 回と徐々に増加、さらにブレスレットを渡すという手続きを始めた第 III 期は 2.7~4.7 回と顕著に増加した。またかかわり手 S に向かって移動する動きが、セッション 12 から見られるようになった。

2) M からかかわり手へ向けての情動表出の変化

一緒に演奏するかかわり手 S からの最初のかかわりに対する M の反応はセッション 10 までは「笑顔にはならないが、相手に対して何らかの反応を示す」が多かった。しかし、セッション 11 から「笑顔になり、手も振る」が見られるようになった。

4 共同的活動としての音楽活動における M とかかわり手との相互作用の様相

分析の対象として、セッション 1、8、16、23、25 の 5 回を抽出した。図 4 より A 水準は増加していったが、相互作用の開始者がかかわり手であることが多く、M からの相互作用はほぼみられなかった。B 水準はほとんどみられなかった。また、図 5 より A-II の継続時間の平均は徐々に増加し、セッション 25 が 7.7 秒で最大となった。

VI 考察

図 1 よりこれまでのかかわり合いのなかで M の喜びの情動表出のみられた「小鳥の歌」を再開したセッション 10 から演奏中の情動表出が増加し始めた。よって、演奏する曲が M にとって楽しいものであることで、M の自発的な身体表出を引き出すことができることが確認できた。しかし、図 2 より同じ「小鳥の歌」でも第 I 期より、第 II 期、第 III 期の方が喜びの情動表出が活発になったことから、「小鳥の歌」が活動の当初よりも喜び満ちた活動へと変化したと考えられる。その要因としては、図 1、図 3 より M の情動表出が促進され始めた時期と M からかかわり手へ向けての表出が促進され始めた時期がほぼ重なっていることを考えると、演奏する曲自体楽しさと、音楽を共同的活動として行なうなかで M にとってかかわり手とともに活動することによる楽しさの双方を促進していくことが重要だと考えられる。

また図 4、図 5 より B 水準が全体を通して低い割合を示したことから、かかわり手は M の表出があった場合、反応を返したり、M とその行動を確認 (以下、表出確認と記す) することができていたと考えられる。また A 水準は回を重ねていくにつれて増加傾向を示している。よって M とかかわり手との相互的なコミュニケーション促進されるためには、1) 活動を繰り返し継続的に行うこと、2) M とかかわり手との間で活動が共有されていること、3) M の身体表出を読み取り、表出確認を丁寧に行なうことが重要であると考えられる。

これらのことから、M の身体表出及び M とかかわり手との相互的なコミュニケーションを促進するためには、共同的活動としての音楽活動を行なうことが有効であると考えられる。

文献

- 伊藤恵子・西村章次 (1999) 自閉性障害を伴う子どもの相互成立要因に関する分析的研究 発達障害研究 20 (4), 316-330.
- 三宅和夫・岩井邦夫・伊藤規博・後藤守・臼井博・吉村典子 (1974) 乳幼児発達研究の探求. 北海道大学教育学部紀要, 23, 1-66.
- 土谷良巳・菅井裕行 (2000) ネゴシエーションの視点から見た初期的コミュニケーション—先天的な盲ろう二重障害におけるコミュニケーションをめぐって—. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 27, 77-88.